痒み発話と掻く行動はいかに会話に埋め込まれるか —日常会話コーパスの事例から—

How Itch-Related Utterances and Scratching Behaviors Are Embedded in Conversation: Evidence from a Corpus of Japanese Everyday Talk

細馬 宏通[†]，飯山 陸[†]
Hiromichi Hosoma，Riku Iiyama
[†]早稲田大学
Waseda University
hhosoma@waseda.jp, iiymr20617@fuji.waseda.jp

概要

While the sensation of itch is often regarded as a subjective, individual phenomenon, it can become socially manifest through verbal expressions and scratching behavior, potentially triggering social interaction. This study analyzes instances of itch-related utterances drawn from a corpus of Japanese everyday conversation. By examining the timing of both verbal reports and scratching actions, the analysis demonstrates how these behaviors are skillfully embedded into the ongoing conversation without disrupting its flow. The findings suggest that the sensation of itch may function as a resource for social interaction.

キーワード：痒み，会話分析，相互行為，掻き

1. はじめに

本論では，「痒み」といういっけん個人的で生理的な現象が，社会相互行為の中にどう組み込まれているかを分析し，痒みの社会性について考察する．

かつては，痒み itch は軽度の痛み pain と見なされたこともあったが，最近ではいくつかの異なる神経サブポピュレーションを持つ現象であり，掻く反応（以下「掻き」）を引き起こし，限られた部位に局所的な注意を引き起こす点で痛みと異なることが指摘されている (Rinaldi 2019).

医学的には，痒みは個人の症状であるが，一方で痒みは社会相互行為の資源ともなりうる．

一つには，痒みを生じる部位の皮膚の変化を視覚的資源とするものである．医者と患者の相互行為の中では，皮膚の変化を提示することや視認することが，症状の分析や解釈の手がかりとなる．また，日常生活の中でも，わたしたちは自身の皮膚の変化を他者に提示したり（例：「ここ腫れてない？」）他者から指摘される（例：「そこすごく赤くなってるよ」）ことで，それを自身の痒みと結びつけることがある．

痒みが単に内的な現象であるにとどまらず，しばしば掻きを伴うことも，それが社会的な現象となりうる可能性を示唆している．なぜなら，痒み自体は目に見えなくとも，掻き自体は，他者から視認できるからである．菅原（1987）は，人前で思わず知らず自分の身体に触れる自己接触行動を起こすとき，そのタイミングは会話の中で特定の位置を占めうることを明らかにしているが，同じことは，掻きにおいても起こりうると考えられる．痒みは，皮膚上のもののみならず，鼻づまりや喉の奥などでも感じられるが，こうした場合には，鼻すすりや咳払いなどの行動が，聴覚的な手がかりとなって，他者から聞き取ることができるため，やはり社会的な現象となる可能性がある．

さらに興味深いのは，「痒い」ことを示す発話（以下「痒み発話」）が掻きや鼻すすり，咳払いなどの緩和行動に随伴する場合である．「日本語日常会話コーパス（CEJC）」（小磯他 2023）の全発話を「痒」で検索すると，「痒い」発話とともにが起こっている例が見つかる．痒みや緩和行動は，個人の生理的な現象として捉えられやすいが，発話によって緩和行動の原因が明示されているということは，痒みが発話と緩和行動を介して会話の中に組み込まれていることを意味する．では，痒みが発話によって表現され，なおかつ緩和行動が起こるとき，それらいっけん個人的な現象は，じっさいにはどのような社会的な現象として立ち現れるだろうか．本論は，痒み発話と掻きが一連の発話連鎖の中で共起する事例を分析することで，その諸相を概観し，痒みの社会性について考える．

2. 方法

「日本語日常会話コーパス（CEJC）」（小磯他 2023）の全データを「痒」「掻」で検索し，ヒットしたものの中

から，緩和行動の起こっていた事例を抽出した．各事例の発話前後の連鎖と視線，身体動作を分析するとともに，痒みが言及された文脈を調べた．発話，視線，動作分析には ELAN（Sloetjes et al. 2008）を用いた．

3. 結果と考察

3-1. 抽出例全体の傾向

コーパスからは痒み発話を含む30のエピソードを抽出した．このうち，患部を直接掻く事例が 13 件，また，鼻づまりや咳払いを伴う事例が 4 件見られた．これら 17 件のうち，痒みに関する先行発話連鎖があったのは 1 件のみで，他はいずれも突発的に痒み発話が起こっていた．またその場の他の参加者が痒み発話に対して応答している例は 3 件のみであり，多くの事例では痒み発話は，応答を得なかった．以上のことから，少なくとも発話の上では，多くの痒み発話は突発的に起こり，また応答を得ずに会話から消えることがわかる．

しかし，掻きや鼻すすり，咳払いなど，痒みを緩和する行動に注目すると，痒み発話の 2 秒以上前からこうした行動が出ているものは 17 例中 12 例あり，先にこれらの緩和行動が相手から視聴覚的に認知できる状態になってたのち，発話が始まっていた．これらの場合，痒み発話は突発的というよりは，むしろすでに先行していた緩和行動を明示する発話として解釈しうる．

3-2. 緩和行動が痒み発話に先行する場合

緩和行動が先行する場合，他の参与者は，発話以前に，当人の痒みを認知することができ，痒み発話によってそれを確定し，話題や聞き手選択を調整することができると予想される．この過程が実際にどのようなものかを分析するために，ここでは 2 つの事例 1，2 を取り上げる．

事例 1「鼻がかゆくなっちゃった」は，萌，玲奈，佐久の 3 人による会話である．萌と玲奈は隣り合って座

01 萌： あたしは:
02 玲奈： うん
03 萌： あ
04 （0.4）
05 萌： じゃあ 違うので探そって思ったときに:
06 玲奈： [うん]
07 佐久： [うん]
08 萌： アーロン
09 (0.3)
10 萌： は猫なんだけど:。
11 玲奈： うん。
12 萌： 猫[のを見つけて]
13 玲奈： [アーロン猫なんだ]
14 萌： そう。
15 萌： 猫[なんですよ:]
16 佐久： [°鼻 痒くなっちゃった°] ←
17 萌： で：しかも：
18 玲奈： うん。

事例 1「鼻かゆくなっちゃった」

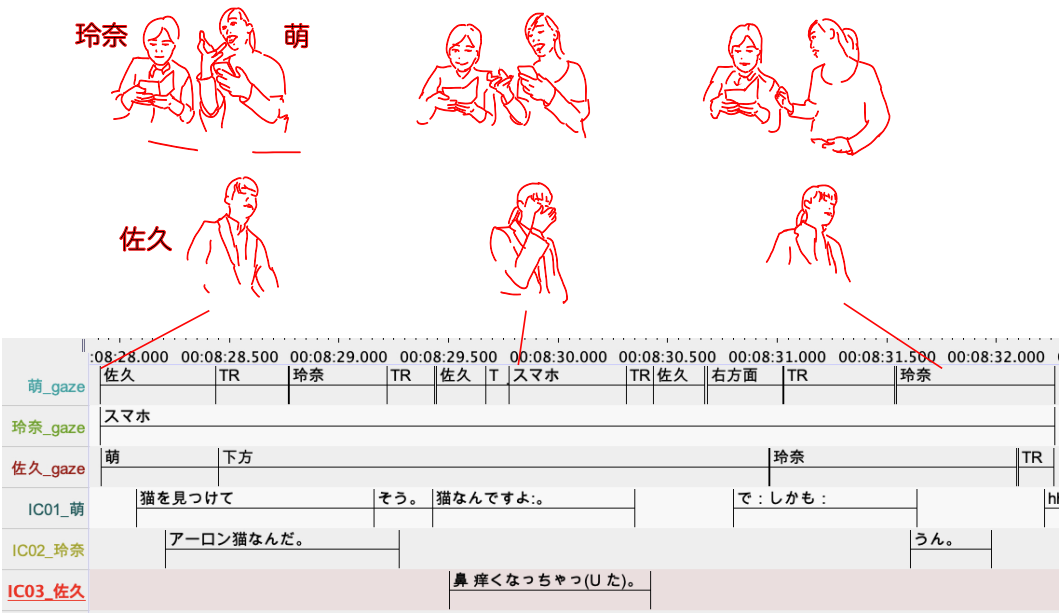

図 1：事例 1 における各参加者の視線変化．TR は視線の移動中を指す．

っており，佐久は玲奈の向かい側に座っている（図 1）．萌は，ある作家のぬいぐるみに自分がいかにはまっているかを話している．萌はすでにバーニーという犬のぬいぐるみを持っており，それとは違うぬいぐるみを探すうちに，アーロンというぬいぐるみを見つけたことを語る．その間，玲奈はずっとスマホで作家のサイトを検索しており，視線をスマホに向け続けている．その結果，萌は主に佐久に視線を向けながら話をしている．しかし，佐久は 1 行目以前からしばしば顔をしかめて鼻をすすりながら話を聞いており，その様子を萌は話しながら見ている．

12 行目「猫のを見つけて」で，佐久が下方を向き顔をしかめると，萌はスマホを見続けながら「アーロン猫なんだ」とオーバーラップ発話をする玲奈の方を一瞬向き，再び「そう猫なんですよ」（14,15 行目）で再び佐久の顔をモニターする．しかし，佐久が小声で「鼻痒くなっちゃった」（16 行目）と顔をしかめながら言うのと同時に，玲奈のスマホに視線を移し，発話を終えた佐久が未だに視線を下に落としているのを見たあと，視線を右に逸らしながら，「で：しかも：」（17 行目）と発話を続ける（図 2）．

このように，事例 1 の主たる話者である萌は，聞き手の佐久を短時間モニターしながら，聞き手が痒み発話を開始した直後に視線を逸らし，痒み発話の終了とともに短く佐久を見たあと，佐久の視線がこちらを見ていないことを確認し，その後は痒み発話に対しては応答をしないまま，視線を逸らしたまま前の発話の続きを発している．萌は，痒みによってこちらに視線を向けることのできない佐久に代わって，スマホを見つめている玲奈にあえて視線を向けることで，一時的に佐久を主たる聞き手から外しながら，話題を継続をしているのである．

事例 2「浅草の伝統工芸」では，優香と広瀬，千秋と洋平の 2 人組が向かい合って喫茶店で雑談をしている．

01 千秋　仲見世の裏っ[側ぐらいのところ]
02 優香　　[はあはあ はあ　]はあ はあ。
　　((優香：鼻を押さえながら鼻声で)
03 広瀬　う：：[：：：：：ん
04 優香　　[同じかも[じゃあ
05 千秋　　[同じだね
06 優香　同じだ:
07　　(0.8)
08 優香　鼻痒い。
09 千秋　それ:
10　(0.6)
11 千秋　浅草の:伝統工芸だけど:。

事例 2「浅草の伝統工芸」

優香の持っているバッグを千秋が他の店で見かけ，それがどうやら優香の買った店の支店であったことが話題になっている．千秋は自分の行った店の場所を 1 行目で特定しようとしている．

発話を見る限り，優香は千秋の発話の 1 つ 1 つにあいづちを打っており，千秋の主たる聞き手は一貫して，バッグの持ち主である優香であるように見える．しかし，優香は 1 行目以前に何度か鼻を押さえており，2 行目では鼻を押さえたためあいづちが鼻声になっている．視線配分に注目すると，三人の視線には変化が見られる（図 2）．1 行目でジェスチャーを行う自身の手と優香を交互に見ていた千秋は，3,4 行目でオーバーラップしながらあいづちを打つ広瀬と優香を交互に見たあと，一貫して手元のグラスに視線をやるようになる．一方，優香は 3 行目で一瞬千秋をちらと見たあとはずっと下方にあるスマホを見ている．その結果，04, 05 行目で千秋と優香は発話の上では同意しているが，二人とも視線は下方に落ちている．広瀬は 2 行目で鼻声で応える優香を見たあと，3 行目で千秋と視線を交わし大きくうなずき，珈琲をひとくち飲み，千秋と優香を交互に見る．一方，12 行目以降，優香は一貫してスマホに目を

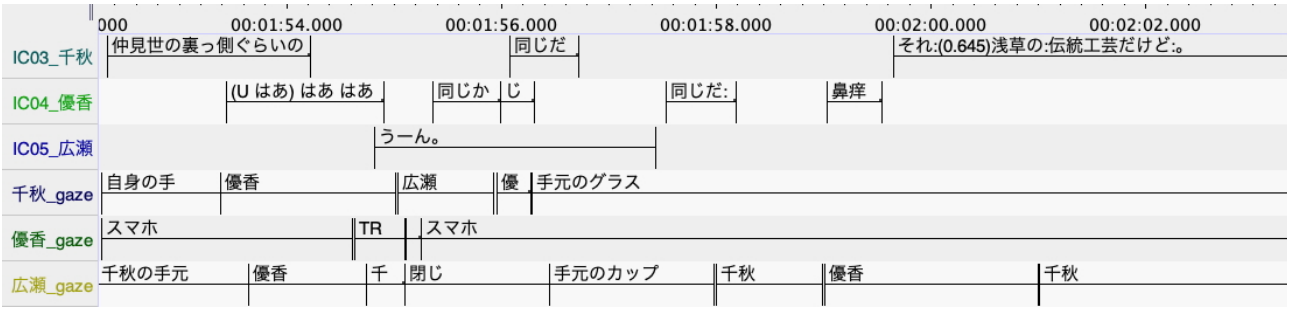

図 2：事例 2 の各参加者の視線変化．TR は視線の移動中を指す．

落としている．この結果，広瀬は直接自身の話題ではないにもかかわらず，千秋に視線を送り続け，主たる聞き手であるかのように振る舞っている．

このように，1 行目からすでに優香は千秋の説明にほとんど視線を向けることができておらず，鼻すすりと鼻をおさえるジェスチャーで鼻の不調を示している．9 行目の「鼻痒い」は，優香の不調を発話によって改めて顕在化し，優香が，自身の持ち物が話題であるにもかかわらず聞き手として妥当な視線配分をできていないことを，「鼻の痒さ」によって説明するかのように位置づけられている．また，千秋はこの 09 行目に対して応答を行わず，10 行目以降，前の話題を継続することで，優香の「鼻痒い」が進行中の話題に影響を与えていないことを示す一方で，優香に視線を向けないことで，優香を主たる聞き手から外している．

3-3. 音楽性のある痒み発話の場合

```
01C    ぽい((C:匙の水を切る))
02     (0.6)
03D    ぽい
04C    もう一個あんな
05     (2.5)
06D    お箸持った？((C:台所から居間に移動))
07     (0.6)((D:台所から居間に移動))
08C    うん
09D    偉い〈足を一瞬あげて掻く〉
10D    °かゆい°          ←
11     (1.6)
```

事例 3「偉い，かゆい」

興味深いことに，自身の痒みが歌として歌われたりリズミカルに唱えられている例が 17 例中 3 例あった．いずれの場合も，痒み発話を行っている最中に，聞き手は話者の方を向いておらず，発話終了後も聞き手に視線を移すことはなかった．事例 3「偉い，かゆい」はその一例である．C と D は台所でともに朝食の準備を終え，仕上げに C が洗った匙の水を流しで一振りして切りながら「ぽい」（一行目）と言うと，D はそばでおどけた口調で「ぽい」と真似をする．二人は 6-11 行目で台所から居間に食器を持って移動するが，D はその途中で，C に「お箸持った？」と確認をし（6 行目），C が「うん」と応えると「偉い」と言ってから即座に同じ 3 モーラで「かゆい」と言いながら脚を一瞬あげて掻くき，すぐに歩き始めて居間に移動する．事例 3 での痒み発話は，D の歩行が痒みによって滞った瞬間に発せられることで，D の歩行が一瞬 C に遅れたことを示す一方で，それが「偉い」と対になるリズムを取っておりしかも小声で発せられることで，先の「ぽい」「ぽい」（1,3 行目）というリズミックなやりとりを想起させ，現在の行為を中断する事態ではないことを示している．じっさい，C は「かゆい」という発話後も，D の方を振り向くことなく居間に移動する．痒み発話にあえて音楽的な構造を載せることは，発話で示されている事態が，進行中の行為を中断させるほど深刻でないことを相手に伝える効果があるのかもしれない．

以上のように，痒み発話は，掻きをはじめとする緩和行動とも起こり，相手に痒みを認知させ，本人を主たる聞き手から一時的に脱落させる一方で，現在進行中の話題や行為を妨げない形式で発せられる傾向がある．このように，痒みといういっけん個人的なできごとは，発話や行動として顕在化することによって，社会的な相互行為に組み込まれうるのである．

本稿では紙幅の都合で，他の参加者が痒み発話に対して応答している 3 件について詳細に分析することはできない．しかし，そのいずれもが家族内の会話で起こっていること，そしてうち 2 件では，親から子への掻き行動，姉弟間の掻き行動の同調が起こっていたことは注目に値する．掻き行動が他者によって忌避されるのではなく能動的に扱われるには，家族のような親密な関係が必要なのかもしれない．

4. 文献

Khalil, Nicole B., Giulia Coscarella, Firdaus S. Dhabhar, and Gil Yosipovitch. 2024. “A Narrative Review on Stress and Itch: What We Know and What We Would like to Know.” Journal of Clinical Medicine 13 (22): 6854.

小磯花絵・天谷晴香・居關友里子・臼田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康晴・西川賢哉・渡邊友香 (2023)『日本語日常会話コーパス』設計と特徴」『国立国語研究所論集』24, pp. 153-168.

Rinaldi, Giulia. 2019. “The Itch-Scratch Cycle: A Review of the Mechanisms.” Dermatology Practical & Conceptual 9 (2): 90–97.

Sloetjes, H., & Wittenburg, P. (2008). Annotation by category - ELAN and ISO DCR. In: Proceedings of the 6th International Conference on Language Resources and Evaluation (LREC 2008).

菅原 和孝, 1987,「日常会話における自己接触行動--微小な「経験」の自然誌へ向けて」『季刊人類学』18(1):p130-209.